

《研究ノート》

サッカー選手の移籍から見た国際関係・補遺（アフリカ編）

寺 阪 昭 信

International Relationships as seen through the African Transfer System of Professional Football Players AKINOBU TERASAKA

キーワード

アフリカ（Africa）、ヨーロッパ（Europe）、アフリカ選手権（African Champions League）、選手の移籍（Transfer System）、ワールドカップ出場国（World Cup Qualification）

1 はじめに

先の小論「サッカー選手の移籍から見た国際関係—ヨーロッパを中心に」（『流通経済大学論集』42巻3号）の刊行（2008年1月）直後にアフリカ選手権（African Nations Cup）が1月20日から2月10日にかけて開催された。アフリカのガーナに予選を勝ち抜いた16国が集まり、首都のAccra（人口166万人、2000年、国連世界人口年鑑による、以下同じ）他、Kumasi（117万人）、Secondi（11万人）、Tamale（20万人）の4都市で試合が行われた。日本の新聞にも結果は小さく載ってはいたが、一般紙では記者を派遣するほどの関心がもたれていないので詳細を伝える情報がアフリカのサッカーについては伝わってこない。しかしながら外国のサッカー誌にはある程度の記事が掲載されているので、そこから出場国代表選手の所属チームが分かり、ヨーロッパの主要チームには多数のアフリカ選手が所属している姿が見えてきた。

前回にも若干指摘しておいたが、旧植民地関係からアフリカからイングランド、フランスなどの国への移籍が多く、さらにフランス経由でヨーロッパ各地に入り込んでいるということであった。アフリカとヨーロッパとの関係について書き残していた部分のうち、アフリカ選手の

移籍動向がヨーロッパ5大国の一部リーグ所属以外の選手層を含むより幅の広い層のつながりが分ってきたのでここに整理してみた¹⁾。もちろん、そこに記載されているのは両地域間の選手移籍全体の一部ではあるが、アフリカのサッカー強国における一流とみなされる代表選手層であり、移籍の大勢を占めているものと考えられる。ヨーロッパのチームの中には主力選手が欠けて、この期間の戦力の低下に悩むチームも出てきたともいわれている。

これ以外にも、最近ではアフリカからは主として中東産油国（カタール、バーレーンなど）に対して国籍を取得して（FIFAの規定では2年以上住むという条件）帰化するという方法で多くの選手流出が見られるようになってきた²⁾。当然、王族支配と石油収入による豊かな中東諸国リーグのチームには多数のアフリカ人が加わっていると思われるが、今のところそのデータを持ち合わせてはいない。もちろん、合衆国のメトロリーグにも加わっていると推測されるが、その資料はないが、少なくとも代表レベルの選手層からは加わっていないようである。

日本とアフリカ諸国との人的関係についていえば、Jリーグ発足以降、多くの外国人選手枠をブラジル人（約60%）とヨーロッパ諸国の選手に依存してきたので、アフリカとの関係は希薄である。カメルーンのエムボア（ガンバ大阪

1997-98, 柏, 神戸2003-05) が恐らくもっとも強く記憶に残っているのではないと思われるが, その他にも6カ国9人来ていて, 現在も1人プレーしている³⁾。アジア諸国とのつながりでは韓国とは比較的多いが, 中国や東南アジアともつながりはほとんどないという状況である。また, 日本から海外に選手として出ていったのは1977年の奥寺泰彦以来現役を含めて50人になるが⁴⁾, アフリカには誰一人行かなかった。アフリカチームとはAチーム・U23の国際親善試合, オリンピックで時々対戦するに過ぎない。ただし2005年からクラブ世界選手権(トヨタカップ)が組織換えされてクラブワールドカップとなり, アフリカチーム(この2回はエジプトとチュニジア)が加わり, ようやくその姿の一部が見えてきた状況である。

2 アフリカサッカーの概況

まず, 16国の現在の状況(FIFA順位), アフリカ選手権の成績, 各国の1部リーグの構成などを見た上で(表1), ヨーロッパに移籍している選手の行き先と人数を整理してみる(表2)。国単位の選手権は1957年に開始され⁵⁾, 最初の5回はやや不規則に開かれたが1968年以来2年ごとに行われてきた。2008年が26回目にあたる。アフリカのサッカー連盟加盟国数は53に及ぶが開催国, 優勝国もまだかなりの偏りが見られる。開催国数は15, エジプト, ガーナが4回, エチオピア, チュニジアが3回, スーダン, ナイジェリアが2回そして1回の国が9ということになる(2000年はガーナ・ナイジェリ



注：国名 EGY：エジプト MAR：モロッコ SUD：スーダン TUN：チュニジア BEN：ベナン CMR：カメルーン CIV：コートジボワール GHA：ガーナ GUI：ギニア MLI：マリ NGA：ナイジェリア SEN：セネガル ANG：アンゴラ NAM：ナミビア RSA：南アフリカ共和国 ZAM：ザンビア 国略号は表1・2にも使用。太線は地域区分。

図1 アフリカ16国

アの2国で開催されたのを除くと1国単位で開催されている。優勝国は14国、そのうち10回が開催国ということで、この広大な大陸の多様な国ぐにで構成されているアフリカではそれだけ地元が有利になるということであろう。そのなかではここ2回連続して優勝しているエジプトの6回が群を抜いた成績を残している。ガーナ、カメルーンのそれぞれ4回がそれに続く。

ワールドカップの出場国というもう一つの基準からするとカメルーンの5回が最高であり、モロッコ、チュニジアの4回、ナイジェリアの3回、エジプト、南アフリカ、アルジェリアの2回という順になり、1回の国が5国の合計12国に限られる。現在のFIFAのランキング（2008年4月）でいえば50位以内の9国はすべて出場していることになる。また、100位以下の国が3国出場したが、成績が振るわなかったのを見ると若干の例外があっても順当な現在の力関係が示されていると思われる。

2008年大会出場16国をアフリカ連盟の基準により地域別に分類すると⁶⁾、西アフリカが7と半数近くを占め、南アフリカが4、北アフリが3で、東アフリカと中央アフリカはそれぞれ1

という偏りを見せている⁷⁾（図1）。今回の大会に出場した16国以外に重要な国（ワールドカップ出場経験がある国）としては、最近やや力が落ちてきたアルジェリア（1982、86年の2回、アフリカ選手権1回優勝、FIFA103位）とコンゴ（ザイールとして1974年、アフリカ選手権2回優勝、110位）の他にトーゴ（2006年、69位）がある。この大会の初期には東アフリカのエチオピアもワールドカップ出場はないがアフリカ選手権を2回開催し1度優勝して存在感があったが現在は低迷している。

人口1億人を超えるナイジェリア（アフリカ最大規模）のような例を別格とすれば、面積的にも小さく、人口1～2千万人程度の規模の国（特にギニア湾岸国では面積的にも小さい）が多い西アフリカがアフリカサッカーを代表していることになる。経済面からしても表1に見るように、1人当たり国民所得で比較するとカメルーンを除き1,000ドル未満の東アフリカとともに貧しい国が多い。ギニア、マリなどは世界最貧国に分類される。最も高い南アフリカ共和国と較べると10倍以上の格差が開いている。西アフリカに較べると、北・南アフリカは資源国

表1 アフリカ16国サッカーの状況

地域	国名	ACF順位		ACF 優勝数	WC 出場回数	FIFA順位 08年4月	国内1部 リーグ	登録選手数 (男)	プロ選手	チーム数	人口 1,000人	1人当たり 国民所得ドル	独立年	AFC 加盟年
北	EGY	1	1	6	2	30	14	13,768	350	6,000	74,033	1,350	1922	1957
	MAR	11	16	1	4	46	16	30,639	100	3,374	30,540	1,900	1956	1966
	TUN	5	8	1	4	53	14	26,271	311	1,309	10,029	2,970	1956	1960
東	SUD	16		1	0	107	12	18,000	0	2,500	34,512	810	1956	1957
西	GUI	8	8	0	0	41	16	8,000	0	700	9,370	410	1958	1962
	MLI	10		0	0	44	14	3,900	0	?	10,525	440	1960	1963
	SEN	12	4	0	1	45	18	6,593	50	12,200	10,848	750	1960	1963
	BEN	15		0	0	103		4,500	0	400	6,770	540	1960	1969
	CIV	4	2	1	1	22	14	11,000	50	1,200	19,097	870	1960	1960
	GHA	3	16	4	1	14	16	15,000	0	1,500	18,412	520	1957	1958
	NGA	7	3	2	3	39	20	35,000	1,400	1,320	140,004	640	1960	1959
中	CMR	2	8	4	5	17	18	12,450	450	3,000	14,439	1,080	1960	1963
南	ANG	6	16	0	1	65	14	5,000	0	500	17,024	1,980	1975	1996
	NAM	14		0	0	127	12	4,000	0	200	1,817	3,230	1990	1990
	RSA	13	16	1	2	69	16	40,000	250	2,000	46,888	5,390	1961	1992
	ZAM	9	16	0	0	68	16	7,409	49	24,350	11,090	630	1964	1964

資料：サッカー関係はOliver,G (2006): Almanac of World Football 2007, Headline Publishing Group, Londonの各国データによる。

人口、1人当たり国民所得は『世界年鑑』2007年版による。

注1) 国の配列はアフリカサッカー連盟のホームページにおける5区分（図1の実線）、その中は国の略記号アルファベット順、図1注参照。

2) マリのチーム数は103,400とあり誤植と思われるので外した。セネガルーザンビアも1桁多いか？ベナンのリーグ数不明。

もあるので相対的に豊かであり、近年では出場国の割合が多くなっている。

このような比較をしてみるとサッカーの世界では今回参加国のない東アフリカ、中央アフリカ地域の影が薄いことに気がつく。もう一つ異なった材料からアフリカサッカーの力関係を見ることが出来る。アフリカサッカー連盟の年次総会（30回）の開催都市である。4回がカイロとアクラ、3回がチュニスとエチオピアのアジスアベバ（いずれも初期）、スーダンのハルツーム、あとはすべて1回である。地域別にみると北アフリカは11回（スーダンの3回を加えると14になる）、西アフリカが9回と2/3を超え、南アフリカは1回しか開かれていない⁸⁾。これには政治混乱や、民族紛争などの社会環境も当然関係するが、北・西アフリカが主導権を握っていることがわかるであろう。

そのことは、アフリカ国内のリーグが12～

20チームで構成されているという標準的なスタイルをとっていて、チーム総数もかなりあるにもかかわらず、プロ選手はきわめて少なく、西アフリカでは0人が半数以上の国に見受けられることに示されている。エジプトおよびマダガスカル諸国の北アフリカに南アフリカ共和国を加えたグループと西アフリカ諸国との間にはサッカーの基盤に格差があることが見えてくる⁹⁾。このような西アフリカの環境（FIFAランクが上位の国が多い）がサッカー選手の海外移籍熱を高めている一因と考えられる。

3 選手のヨーロッパ諸国への移籍

16国の代表選手がヨーロッパのどこの国のリーグに所属しているかを整理したものが表2である。行にアフリカの国、列に受け入れ国をヨーロッパ（FIFAへの帰属）と、その他（ア

表2 アフリカ選手の移籍（所属リーグ）

	母国	BEL	BUL	CYP	DEN	ENG	ESP	FIN	FRA	GER	GRE	ISR	ITA	NED	NOR	POR	ROU	RUS	SCO	SUI	SWE	TUR	UKR	E計	Afr	M.E.	Ame	外国計
EGY	20	1				3				1				1								1		7		3		10
MAR	4		1	1		1			6				1			1				1			2	14	1	4		19
TUN	12					2			3	2								1		2				10	1			11
SUD	31																							0				0
GUI	2	1							8				1						1	1		5	1	18	3			21
MLI	3	1				2	3		6		2		1					1			1			17	2	1		20
SEN	1	1				7			9			1				2				1				21			1	22
BEN	7				1	1			5				2			1				2	1			13	5			18
CMR	1		1			3	2		6	3						1		1				2	1	20		1	1	22
CIV	3					7	2		6	4						1	1							21				21
GHA	3	1				5	1		2	1	1	1	2	1	1			3	1					20				20
NGA	0		1			9	1		4			1	2				1	1		2				22				22
ANG	14					1			2							7				1	1			12	2	2		16
NAM	12				1					2					1									4	13			17
RSA	15	1				2				2	1	1									1			8				8
ZAM	11				1			1	1	2											1	1		7	10			17
人数計	139	6	3	1	3	43	9	1	58	17	4	3	10	2	2	13	2	7	2	10	5	9	4	214	37	11	2	264
国数		6	3	3	3	12	5	1	12	8	3	3	7	2	2	6	2	5	2	7	5	4	3					

資料：World Soccer 2008 Februaryによる。

注1) 左端アフリカの国名は図1注参照 母国とは母国リーグに所属することを意味する。

ただし、資料では登録人数23名より多くの選手名を載せている国がある（母国のゴチ）。本来は母国+総計=23名である。

- 2) 第1行ヨーロッパの国名 BEL：ベルギー BUL：ブルガリア CYP：キプロス DEN：デンマーク ENG：イングランド ESP：スペイン FIN：フィンランド FRA：フランス GER：ドイツ GRE：ギリシャ ISR：イスラエル ITA：イタリア NED：オランダ NOR：ノルウェー POR：ポルトガル ROU：ルーマニア RUS：ロシア SOC：スコットランド SUI：スイス SWE：スウェーデン TUR：トルコ UKR：ウクライナ

- 3) E計とはヨーロッパ諸国への合計を指し、Afrはアフリカ諸国、M.E.は中東諸国（主として湾岸諸国）、Ameはアメリカ大陸をさす。

- 4) 国数はヨーロッパの国から見て、アフリカ16国からの出身国数を示した。

フリカ、中東、アメリカ大陸）に分けた。南アメリカへの移籍は考えにくいし、先にも述べた北米に若干の可能性はあるとしてもヨーロッパへの移籍が全体の動向を支配しているとみなして誤りはなかろう。ヨーロッパについては22国の広範囲にわたっている。旧社会主義国の東ヨーロッパとバルト三国とルクセンブルクなどの小国を除くとヨーロッパのサッカー主要国全域に及んでいる¹⁰⁾。すなわち、イスラエル、キプロスがありながら、ポーランド、チェコ、クロアチアなどの中堅国が抜け落ちているのは意外な気がする。

フランスの58人を筆頭に、イングランドの43人、ドイツの17人と上位3国で過半を占めている。フランスへの58人中49人まで（約85%）が旧フランス領出身者で固められており、イングランドについても43人中20人と半数近くが旧植民地からになっている。次いでポルトガルになるがここでも13人中半数以上の7人が旧植民地アンゴラからであり、旧宗主国と植民地国との関係が改めて強調できる。さらにはイタリア、スイスと続き、スペインは距離的には最もアフリカに近くても9人とさほど多くないし、国も分散している。スペインはモロッコから多く移籍してもよいと思えるが北アフリカ出身者はいない。要するにヨーロッパ5大リーグに137人、52%が集中していて、残り57人が17国に分散している。フィンランド、キプロスの各1人を含めて、4人以下の国が11国あり、27人、北ヨーロッパ・東ヨーロッパに多い。

ドイツ、イタリア、スイス、それにトルコを含む諸国との関係は単純に移籍料、契約金あるいは監督・GMの意向によるものか、より深い分析材料がなくては判断できない。旧社会主義圏についてはロシアが豊になってきたので、7人とそれなりの数があるのを別とすると、ウクライナ4人、ブルガリア3人、ルーマニア2人に限られるのは金額面での制約とみなしてよいであろう。ヨーロッパ連盟の中では相対的に下位にあるイスラエル、キプロスも多くのアフリカ諸国にとっては上位ランクの国になるから

移籍があることは納得がいく。しかし、ロシアや北ヨーロッパで活躍するにはどの程度早く寒冷な気候に馴化できるか個人の能力にかかると思うのだが。

移出国側から見るとスーダンの0人とナイジェリアの全員（23人）という両極がある⁷⁾。カメルーン、セネガルも国内組は1人という少なさで、ギニアの2人、ガーナ、マリ、コートジボアールの3人、モロッコ4人といった主として西アフリカのチームはヨーロッパで活躍する選手層によってチームが構成されている。

イングランドとフランスには16國中12国が、そのうち0人のスーダンを除くとナムビア（この中でFIFA順位が最も低い）が両国にいないこと、フランスについてはナミビアとともにエジプトと南アフリカ（共）という英国色の強い国からの移籍がないことに注目する。イングランドについてはやはりナミビアとともにイギリス植民地という関係であったにもかかわらず、ザンビアとギニアの2国からの移籍がないのは意外な気がする。

16チームの選手総数で見るとおよそ2/3がヨーロッパ諸国のチームに所属していることになる。アフリカ諸国間の移籍はごく一部であり、西アフリカ諸国（ベナン、ギニア、マリ）からエジプトへと、旧ポルトガル領であったアンゴラ、南アフリカの信託統治下にあったナムビア、イギリスの保護領（北ローデシア）であったザンビアという南アフリカ地域の国からからは南アフリカ共和国のチームに移籍するという流れが主流でヨーロッパへは少ない。エジプトもまた、ヨーロッパへは7人しか移籍していない。その分湾岸諸国を目指している。

移籍先が分散しているのはガーナの選手である。イングランドの5人が最も多く、1人の国が多くて、22國中12国に及んでいる。ナイジェリア、カメルーンも9国、マリ、モロッコの8国となり西アフリカの国に多いタイプである。フランスとイングランド、および先ほどのアンゴラからポルトガルを除くと、ギニアからトルコのチームへの5人、コートジボワールからド

イツへの4人が目立つ程度で、1・2人が多い形態である。

アフリカの選手がその能力を高く買われて、ヨーロッパの世界に極めて分散的、普遍的に可能性（当然、高収入をも含めて）を求めて移籍している姿が読み取れる。サッカーの質を維持するうえで、アフリカ人の能力が高く評価されるようになっていえるのではないか。

追記

執筆後にアフリカサッカーに関する論文を見出した。Bale, J. Three Geographies of African Footballer Migration: Patterns, Problems and Postcoloniality. In Armstrong, G. & Giulianotti, R. eds. (2004): *Football in Africa*. Palgrave.

ここでは2002年大会のデータを用いてヨーロッパへの移動図、新植民地主義、ポスト植民地という3つの視点で分析を行っている。16国311人の選手のうち193人、62%がヨーロッパ諸国のチームに所属していることを報告している。それを見るとその後にアフリカ選手の移籍は増加していることが分かる。またRicci (2000)の1999年のデータを紹介し、890人のアフリカ選手がヨーロッパにいて、ナイジェリア140人、カメルーン97人、ガーナ88人、モロッコ72人、アンゴラ66人等の人数を示し、西アフリカからが多いことを指摘している。受け入れ側のヨーロッパではフランスの94人（外国人中のアフリカ人比48.9%、以下同じ）、ベルギー60人（28.8）、オランダ37人（21.2）、ポルトガル34人（20.2）、ドイツ33人（14.1）という興味深い数字を挙げている。

ヨーロッパのクラブが強力な魅力を元に働きかけてアフリカ選手を集めていることの評価（ヨーロッパに適応できずに底辺に滞留するなどの負の面も含めて）を行い、移動形態として、非合法的な移住、代理人への自薦・推薦（青田刈り）、スカウト組織などの問題点を指摘した論文である。

文献

- 寺阪昭信（2008）：サッカー選手の移籍から見た国際関係—ヨーロッパを中心に『流通経済大学論集』42-3, pp.271-283.
寺阪昭信（2006）：サッカーと地域の結びつき1—ドイツを中心に『流通経済大学論集』41-1, pp.31-46, 寺阪昭信（2006）：「サッカーと地域1—ドイツを中心に」流通経済大学論集41-1, pp.31-46.

資料

- World Soccer 2008 February
Oliver, G. (2006): *Almanac of World Football 2007*. Headline Publishing Group, London p.966
共同通信社（2008）：世界年鑑2008年版 共同通信社p.899
国際連合（2004）：2004年版国連世界人口年鑑 国際連合

注

- 1) World Soccer 2008 February, 他による。
- 2) 森本高史 無国籍？多国籍？アジアの帰化戦略 エルゴラッソ2008年5月2日号16頁 日本がワールドカップアジア3次予選で対戦したバーレーンにはナイジェリア、チャド、モロッコ出身者、カタールにもセネガル、エチオピア、ウルグアイ出身者を帰化させているとのこと。
- 3) 『週刊サッカーマガジン』2008・2・26号 (No.1175) 異邦人たちのJ 1993-2007歴代全外国人選手名鑑による。
- 4) Number 702号 2008・5・8号 1977-2008海外移籍完全事典
- 5) 当時は独立国は少なくAFC—アフリカサッカー連盟、FIFA加盟国も少なく、どの程度の参加国があったのかは不明であるが、北アフリカ諸国を中心に行われていたのではないかと推察される。
- 6) アフリカ連盟の基準による5地域は北アフリカ5、西アフリカA9、西アフリカB7、中央アフリカ9、中央東アフリカ12、南アフリカ14、の56国となる。通常の地理的区分とはやや異なる。
- 7) ここで東と分類されるスーダンは北につながり、東アフリカの軸となるエチオピアやケニアは現在のアフリカサッカーでは存在感が低い。また中央アフリカのカメルーンも普通は西に分類される。
- 8) 1956年の第1回はポルトガルのリスボン、第3回もストックホルム、第2回が最初のアフリカ開催で、それがスーダンのハルツームであった。AFCのホームページによる。
- 9) かつて「サッカーと地域の結びつき1—ドイツを中心に」流通経済大学論集41-1, p.33 (2006)においても触れておいたが、アジアよりはるかにサッカーの普及レベルは高い。
- 10) ヨーロッパに所属するのは51国。